

特別賞 三省堂書店賞

『イスラム戦争：中東崩壊と欧米の敗北』 内藤正典著

情報コミュニケーション学部 4年 長田航平

新書を読んでいて涙を流したのは、これが初めてであった。

それはなぜなのかを考える。『イスラム戦争』という聊か物騒なタイトルからは、どこかハリウッド的な物語が想起されるかもしれないが、本書にはそのような物語はない。だから、その手の“感動、とは別種の、もっと本源的な感覚が涙の理由であるはずだ。

本書は、そのサブタイトルにあるように、中東の崩壊と、中東政策における欧米の敗北について書かれている。著者の内藤正典は、現在の——あるいは近代以降の——中東がどのように規定されているのかを語る。すなわち、第一次世界大戦後のサイクス＝ピコ協定による植民地分割が中東諸国の国境となっている。そして、近代化の過程で、イスラムに本来不適合なシステムを導入したことで歪みが生じている、と。

それが明確となったのが、9・11後のイラク戦争である。アメリカは「テロとの戦い」の名の下に、イラク、アフガニスタンへと攻撃を仕掛けた。まさに「中東崩壊」の始まりであった。その結果生まれたのが、「イスラム国」。終わることなき「テロとの戦い」において、「欧米の敗北」は火を見るより明らかとなった。さらには、中東の市民はこの軍事作戦に巻き込まれ死傷し、彼らはこのことに憤りを覚えている。

内藤はそう語る。彼の視点は欧米からのものではない。中東の市民に寄り添っている。しかし、そうであるのは内藤自身が中東の地域研究者だから、というだけではない。より根本における彼の態度がそうさせるのだ。例えば、内藤は欧米の中東政策を批判しているが、彼は声を荒げることはしない。情理を尽くして、理非を問い、その非を静かに退ける。

その態度は非常に倫理的である。何がそうさせるのだろうか。内藤はこう言う。《私は、地域研究の観点から紛争の抑止と平和の構築、言い換えればこれ以上、理不尽に命が奪われないようにするためには何が必要なのかを追究しています》(p.232)。

では、倫理的とはどういうことなのか。和辻哲郎は、助けを求める声を聞き届けることだと言う。内藤正典はまさにこの意味において、中東の人々があげる助けを求める声を聞き届けている。そして、その声に突き動かされた彼の仕事は、倫理的であると同時に、だからこそ痛切であるのだ。

今日、日本においても中東問題はアクチュアルな問題である。というのも、集団的自衛権を解釈改憲によって認められ、「新安保法案」の成立によって、自衛隊が中東へ派遣される可能性は高まっている。そのような時局において、本書もアクチュアルな意義を持っている。

内藤正典の声が痛切に響く。

わたし達は、この声を聴き届けなくてはならない。それが読者として彼に報いる唯一の方法なのだから。